<table>
<thead>
<tr>
<th>Title</th>
<th>＜資料紹介＞織田作之助全集未収録作品紹介（一）：「近頃大阪色」「禍なる哉長髪」</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>斎藤, 理生</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>阪大近代文学研究. 14-15 P.96-P.102</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>2017-03</td>
</tr>
<tr>
<td>Text Version</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="https://doi.org/10.18910/67761">https://doi.org/10.18910/67761</a></td>
</tr>
<tr>
<td>DOI</td>
<td>10.18910/67761</td>
</tr>
<tr>
<td>rights</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
近頃大阪色 — 禍なる哉長髪

『资料紹介』

緻田作之助全集未収録作品紹介

（一）

斎藤 理生

「近頃大阪色」は一九四〇年八月～四日付の『都新聞』に掲載された作品である。五面に『夕刊コント』として掲載されている。同年九月八日付の『都新聞』第五面に『夕刊コント』として掲載された。以下がそれぞれの全文である（旧字は新字に改め、ルビは省略した）。

緻田作之助

近頃大阪の町を歩いて間違つくなかったためしはない。

「阪大近代文学研究」14・15（2017.3）
ある料理屋で天麴羅井を喰べると、女給がつっかえと寄って来たかと思う。物も言はずにいきなり私の井を取り上げて行き、それはもうあっという間の早業で、何さんねえ、未だ喰べきせやせと言ふ暇も与へなかつた。あっと驚いたが、しかしお座、時計を見るとき、恰度八時だった。未練を残し、料理屋を出、喫茶店に於てはひとり珈琲を注文した。

女のが持って来た伝票を見ると、十銭ある。おかげでちょっと暇も得る。間違つかざるを得ない。業主とolicitしたとき、これを何しろ役所の仕事で、たとへ珈琲を十五銭にしたものか千銭にしたものか、ちよと分らぬやうな、こころさであつた。喫茶店の主人はおろそと迷つてゐたのだ。土砂降りの雨が降って来たが、自動車はない。雨の中

正月であるとか、友人の結婚式があるとか、余程さし迫った事情のない限り、私は理髪店へ出向かない。生来の不精者であるのと、散髪をしてゐる時間が惜しいから、”
そしてこれがいちばんの原因だが、特に頭を乱暴に弄
ならぬと闘い合うとあるのがいやであるから。
それまでも SUCCESS にいうならぬ一寸した快感を感じ
なければならないのだから。一層いやに思う。若い女性が
理髪店の回転椅子に身を固くして横たわってゐるは、
考へたけでもそっとする。
うまい訳で私は年に四五回くらいしか髪理をおこな
ない。おかつで散髪代はかなり節約出来る。おまけに香油やチッ
クの類は使用しないから、化粧品代もゼロである。その
代り、かなり目立つ長髪で、しばしば嘘かと誤解され
て、迷惑される。自らの顔をとらずに、誰かが
私をさかんに、大いに美人を見上げる。私をも
目にする故、何と申すべきか、と頭を思いつく。
もしこの髪を短くして、のれなしに、
その時、時局を反映し

二つコントと同時代

新聞記事を手がかりに

『近頃大阪色』と『思う故長髪』は共に、
時局を反映し
て変わりつつある町の様子や生活を、それに即応できない
「近藤食堂」を通じて滑稽に描いた作品である。
「近藤食堂」の「私」は、デパートの食堂へ行くと、こ
れが当時デパートの食堂で米が禁
止されていたからだと言われる。
「九四〇年七月一日付
大阪朝日新聞」第七面には、「節
米宣戦の布告、百貨店の
食堂からご飯、卵未出
に関する」という記事が掲
載されている。
「大阪朝日新聞」第七面には、「節
米宣戦の布告、百貨店の
食堂からご飯、卵未出
に関する」という記事が掲
載されている。
「九四〇年七月一日付
大阪朝日新聞」第七面には、「節
米宣戦の布告、百貨店の
食堂からご飯、卵未出
に関する」という記事が掲
載されている。
「九四〇年七月一日付
大阪朝日新聞」第七面には、「節
米宣戦の布告、百貨店の
食堂からご飯、卵未出
に関する」という記事が掲
載されている。
「九四〇年七月一日付
大阪朝日新聞」第七面には、「節
米宣戦の布告、百貨店の
食堂からご飯、卵未出
に関する」という記事が掲
載されている。
「九四〇年七月一日付
大阪朝日新聞」第七面には、「節
米宣戦の布告、百貨店の
食堂からご飯、卵未出
に関する」という記事が掲
載されている。
「九四〇年七月一日付
大阪朝日新聞」第七面には、「節
米宣戦の布告、百貨店の
食堂からご飯、卵未出
に関する」という記事が掲
載されている。
「九四〇年七月一日付
大阪朝日新聞」第七面には、「節
米宣戦の布告、百貨店の
食堂からご飯、卵未出
に関する」という記事が掲
載されている。
「九四〇年七月一日付
大阪朝日新聞」第七面には、「節
米宣戦の布告、百貨店の
食堂からご飯、卵未出
に関する」という記事が掲
載されている。
「九四〇年七月一日付
大阪朝日新聞」第七面には、「節
米宣戦の布告、百貨店の
食堂からご飯、卵未出
に関する」という記事が掲
載されている。
「九四〇年七月一日付
大阪朝日新聞」第七面には、「節
米宣戦の布告、百貨店の
食堂からご飯、卵未出
に関する」
作之助はこの逸話を、後年『髪』（オール読物「一九四五」）にも使っている。

髪
では理髪店の時局に即した方針をあらかじめ新聞で
知ってはいたことになっている。それによっては
いう出来事はもちろん。反発を覚えたものの、他の
こと、一度用いた話は別の形で使うことなど、作之助が得意
し、二月半に表される。「大新聞」にたびたび随想を発
表している。『大阪の性格』（七・七・八）であり、今回紹介したコ
メントは、それを先駆けに発表された作品ということができる。方正も『大新聞史』は、『用紙事情の悪化で朝刊写真面
のスペースが圧縮され、それに時代の特有の感情や民心を
とらえつつある』と写真を紹介する。昭和十四年
に、『社会的』刊行より第三号を紹介する。『大阪の性格』を紹介する時、のちに『大新聞史』に掲載された『髪』（オール読物「一九四五」）にも使っている。
『夕刊コン・こん』には、『徳川夢声』、菊田一夫、藤田保、藤浦実、伊野鶴平（春）、鈴木一郎、味岡敏雄（山）、助作、八ツ九一が後ろに代わる新東京東京をこよるえがかなるかの作り取る離局時作戦の九月一日付書簡。大阪府立中之島図書館尾文庫所蔵です。発表媒体は『読売新聞』ではなかったが、もともと頼尊は、次の機会にも作之助や石川淳を推薦しようとしていた。そのためには社長に作之助の存在を印象づけなくてはならない。頼尊と『夕刊コン・こん』、作之助と三高時分に一緒だったことによって、作之助の親友であった白崎礼三と親しかったこともわかる。（2）

作之助と頼尊との具体的な関係がうかがえるのは、『都新聞』に掲載された『東京新聞』の記事である。有志が為すことは必要であると考え、同三〇日付の書簡を大阪府立中之島図書館尾文庫所蔵です。は、随想を依頼している。ここに載せたことはなかっただろうことからも、頼尊があらたに、この後、新戦作派と呼ばれる作家たちに注目していたことがわから

四時局との距離の取り方

ー九四〇年八月から九月の織田作之助は、『夕刊大阪新聞』に連載されている『東京新聞』の記事を引くために、編集部に連絡をとる。その翌々月に永眠してしまった作之助の創作が『東京新聞』に連載されることがなかっただろう。ただ、一九四七年になっても、『東京新聞』に連載されたのが坂口安吾『花嫁』（二・八〇・八・八）であったことからも、頼尊があらたに、この後、新戦作派と呼ばれる作家たちに注目していたことがわから

ー九四〇年八月から九月の織田作之助は、『夕刊大阪新聞』に連載されている『東京新聞』の記事を引くために、編集部に連絡をとる。その翌々月に永眠してしまった作之助の創作が『東京新聞』に連載されることがなかっただろう。ただ、一九四七年になっても、『東京新聞』に連載されたのが坂口安吾『花嫁』（二・八〇・八・八）であったことからも、頼尊があらたに、この後、新戦作派と呼ばれる作家たちに注目していたことがわから
全文削除となった」という。執筆前に、作之助にもその事実が伝えられていた可能性は低い。
その意味で、ここに紹介した二つのコントは、小品ではあるが、全体的に読む価値を認めたことが示されている。作之助の創作活動が、この時期に始まったことを示している。作之助の創作活動は、この時期に始まったことであろう。

注

（1）枝野作之助がこの時期（大阪朝日新聞）を読んでいたのは、確実である。一九四〇年六月～三一・四月に、同紙に随想「小説の思想」を発表しているからである。また、当時の作之助は、木村善夫の『朝日新聞』で随筆を発表していたが、作之助の時局との距離の取り方が反映されているようにも認められる。

（2）モンテ・カルロ（アートシアター）ー九七〇・三一÷
坂口安吾全集別巻０郡木書房ー〇一〇